

Goldschmidt 2002 incorporating ICOG レポート

山田隆二

開催されるかどうかでヤキモキしていました ICOG X が、2002年8月18-23日に、Davos, Switzerlandで開催されました (<http://www.campublic.co.uk/2002/gold2002/>)。結局は、タイトルの通り、Goldschmidtと共催——と言うよりは、取り込まれた形で——となりました。そのおかげで参加者も多く、約900の発表があり、ICOGではあまり聞けないような地球化学関係、特に、機器分析の最新状況についてのセッションが多かったのは良かったと思います。逆に、関連するセッションがパラレルになることも多く、多少不満もあったようです。ヨーロッパのFT関係者は6月に開催された European fission-track workshop, Cadiz 2002に集まっていたらしく、それほど目立ちませんでした。Tony Hurfordは入試関係で忙しくて来られず、Andy Gleadowの発表は急用でキャンセルになったのは残念です。日本からは、FT関係者では京都大グループと金沢大長谷部さん(ロンドンから)の参加でしたが、K-Ar関係者や地球化学関係者など、20~30名は参加していたと思います。

Davosは、菅平で有名な信州真田町と姉妹町の関係にあり、いろいろところで「真田」の漢字を見かけました。また、スイスのリゾート地として、期待通り快適な場所でした。期間中、概して天気は良く紫外線も強烈で、初日は珍しく半袖でも大丈夫ほどの気温でしたが、雨が降った日には上着を手放せません。物価は高めで、昼食は20~40CHF(1スイスフラン=約80円)程度、kioskの水は50cl(dl, clの単位が主流)で、3.4CHFでした。もちろん、ワインとチーズとジャガイモが主食です。水は非常に硬く、中にはミネラル2000mg/lというものもあって、ここまでくると炭酸ガス入りで飲む気持ちになります。

会場は、WEF(World Economic Forum 世界経済フォーラム)

のダボス会議(いわゆる賢人会議)が開かれていた場所です。非常にきれいな会場ですが、なかなか凝った造りで、京都の国際会議場にも負けないほど部屋の把握が難しかったです。発表準備及びネット接続用のPCも多数用意されていたほか、持参したPCもネット接続できるように準備されていました。日本語が使えないのはいいとして、キーボードの"Y"と"Z"が入れ替わっているのには戸惑いました。

会議では、General Symposiaが10、Special Symposiaが49におよび、10の部屋で5日間のオーラルと、2日間のポスターのセッションが用意されました。それこそ会議のサブタイトル通り from stars to lifeで、地球化学関係の幅広いセッション構成です。イベントは充実しており、The Icebreaker Party(土)、Reception by the Mayor of Davos(日、ご機嫌な市長さんのあいさつ)、Traditional Swiss Alpine Evening(月、ケーブルカーで山の上、演奏付 racletteの夕食)、The Conference Banquet(水、大部屋で400人位のディナー)、Farewell Party(木)とほぼ毎日パーティでした。

肝心の業界動向ですが、FTはすっかりツールとして定着しています。特にこれといって新しい動きはありません。その他では、やはり注目は温度履歴解析ツールとしての(U-Th)/He法とLA-ICP-MS(laser ablation inductively coupled plasma mass spectrometry)に絞られるでしょう。FTの低温度領域における感度の良さを生かすには、同程度の温度レンジの(U-Th)/He法は有力なパートナーで、これまでの我々の経験をよく生かせることでしょう。また、技術の進歩とともに価格もこなれてきたレーザーシステム付のICP-MSは、原子炉を使わずにUの定量が出来るだけでなく、その気になれば同時にREEの分析まで同時に可能であるというメリットがあります。

(U-Th)/He 法は徐々に年代測定法として定着してきており、ケーススタディも数多く発表されています。まだ拡散過程や年代の解釈にも問題は多いのですが、すごい勢いで FT を追いかけていることは間違いありません。(U-Th)/He 研究者グループのインフォーマルなミーティング (FT 関係者も多数参加) では、標準試料の準備や、EGS-AGU-EUG Joint Assembly (Nice, France, 07-11 April 2003) にて、FT とのジョイントセッションを持つか、などが話し合われました。

LA-ICP-MS を利用した FT 年代測定の実例が 2 つ発表されました。アパタイトの例ではうまくいかず、ジルコンの例ではほぼうまくいっていましたが、これは鉱物のせいではなく、LA の部分に課題があるのだろうと個人的には思っています。ICP-MS に絞ったセッションでは、LA 部分の問題が盛んに議論されており、U や Pb の分析では LA 時のパーティクルサイズがイオン化に最も重要であること、excimer laser と He キャリアガスを使うと良い結果が得られることなどが示されていました。

会議終了後、Upper Pleistocene Chronologies: The last Glacial Maximum, Termination I and landscape evolution - the need for absolute chronologies という 1 日巡検に行って来ました。Davos から、アルプスの中をバスでぐるりと一周するものです。本物の氷河地形と気候変動の話がおもしろかったです。スイスを代表する高級保養地 St. Moritz でゆったりと昼食を取りましたが、説明者の Christian Schlüchter さんは地すべりの仕事もしているようで、「ここは地すべりが激しくて、高台は年間数センチで動いている。眺めのいいアパートは moving house だ。」と説明していました。今までで最もゴージャスな巡検でした。

なお、次回の Goldschmidt は来年 9 月に倉敷で行われます。Geochronology のセッションでは、Ichiro Kaneoka と Ken Farley が chair を務めるようです。

以上、Davos レポートでした。